

同志社大学

同志社社史資料センター報



Latin.	
Ala	Wing
Victoria	Victory
Causae	Cause, purpose, Business. +
Fortunae	Fortune
Portae	Gate
Dominus	Master
Filius	Son-in-law
Servus	Slave
Anni (Annus)	Year
Pueri (Puer)	Boy
Socii (Socius)	father in law
Magistri (Magister)	Master, leader
Templi (Templum)	Teacher, Temple
Belli (Bellum)	War
Lucus	Grove
Stella	Star
Dionysius	Dionysius, tyrant of Syracuse

1. 巻頭言:2007年度の報告にあたって
2. コラム
「新島襄の父民治の自筆和歌を発見して
—「マタイによる福音書」を踏まえた和歌—」(神谷勝広)
3. 資料業務
4. 展示
5. 公開講演会
6. 研究活動
7. 第165回新島襄生誕記念会
8. 新島旧邸
9. 委員会

第4号
2007年度

2007年度の報告にあたって

同志社社史資料センター
所長 露口卓也

2004年5月開設の当センター初代所長、伊藤彌彦先生の後を受けて1年が過ぎた。2007年度の活動を報告する今号を作成するにあたって、まず基本的ルーチンを作り上げられていた初代所長、支援・協力者の方々、そして何より所員の人たちの努力に謝意を表しておきたい。

2007年度のセンターの活動内容については以下のページを参照していただくとして、ここでは今年度のトピックスと来年度に予定している主要なことを記しておきたい。

トピックスとしては、新出の新島襄書簡を入手したこと(購入に際しては大学のお世話になった。また、この書簡については『同志社談叢』第28号所載の本井論文に詳述されている。)、土倉庄三郎宛新島襄書簡の原本8通を発見したこと(この書簡も『同志社談叢』第28号に写真版を収録している。)が特筆される。Neesima Roomの企画展は、春に「同志社と戦争」、秋に「大正デモクラシー期の同志社」を行ったが、春はマスコミに取り上げられ話題となり、秋はその成果を『同志社談叢』第28号に発表した。公開講演会は、ともに多くの聴講者を得て例年以上に盛況であった。ただし、入館者数のより一層の増加を図る工夫は必要である。

2008年度の予定として挙げておかなければならないのは、企画展では、春に「よみがえるクラーク記念館」、秋には「同志社と早稲田」(仮題)を行う予定である。研究では、第1部門研究の『新島研究』が節目の100号を迎える。新島研究会の方々のより一層の奮闘をお願いしたい。また、第2部門研究(社史研究)を立ち上げるべく準備を進めている。成果が出るのはまだ先かもしれないが、社史資料が活用される研究になるように努力したいと思っている。関係各位のご協力をお願いする次第である。

反省すべきことや手直しの必要なことも少なくない。改善を図りながら2年目に突入したい。

新島襄の父民治の自筆和歌を発見して

—「マタイによる福音書」を踏まえた和歌—

1 新島襄と書

新島襄(1843—1890)は、達筆である。幼い時からの厳しい基礎的な教育が生涯にわたって生きていたのであろう。襄は、安中藩祐筆〔書記役〕の家に生まれている。つまり、書道は家の職業であった。襄は、5歳の時から、父民治(1807—1887)に習字の稽古を受け始めているが、父は神社に詣でた折「息子が書道に熟達するよう」に祈っていたという。しかし襄は悩む。16歳の時の書簡に、次のようにある。(便宜を考え、現代語訳で示す。)

父は祐筆として藩主に随行して行ったので、父の塾は私の手に委ねられた。私はまた藩主からも父の留守中、江戸藩邸で祐筆職となるように命じられた。私は家と藩邸での二重の義務に追い回される一方、ヨーロッパ諸国の事情を知りたいという新たな欲求が起こり、どうしてもそれを抑えきれなくなった。

襄は、父の希望とは異なる道を歩み始める。

2 民治の決断

明治7(1874)年、襄はおよそ10年ぶりに帰国する。民治は、リウマチの病床にあったが、襄の帰宅を聞き、立ち上がって迎えたという。そして、民治はある決断をする。そのことが、襄の書簡からうかがえる。

その時から父は、日本の神々や祖先を崇拜するのをやめました。……わが家には今や神々や偶像はひとつもありません。これからは家族は真の神の信者となるでしょう。

明治10(1877)年、民治は、京都第二公会(現在の同志社教会)で襄から洗礼をうけ、篤い信仰心を持ち続け、明治20(1887)年1月30日に数え年81歳で永眠する。

3 民治の和歌

最近、寺町の古道具屋で、不思議な1枚の和歌短冊に出くわした。非常な達筆で全くぶれのない見事な字体である。ところが、題がとても珍しい。

耶蘇種蒔の喩

霜雪のしたにもゆるる麦畑の

ちからは神の栄えなりけり 七十七翁是水

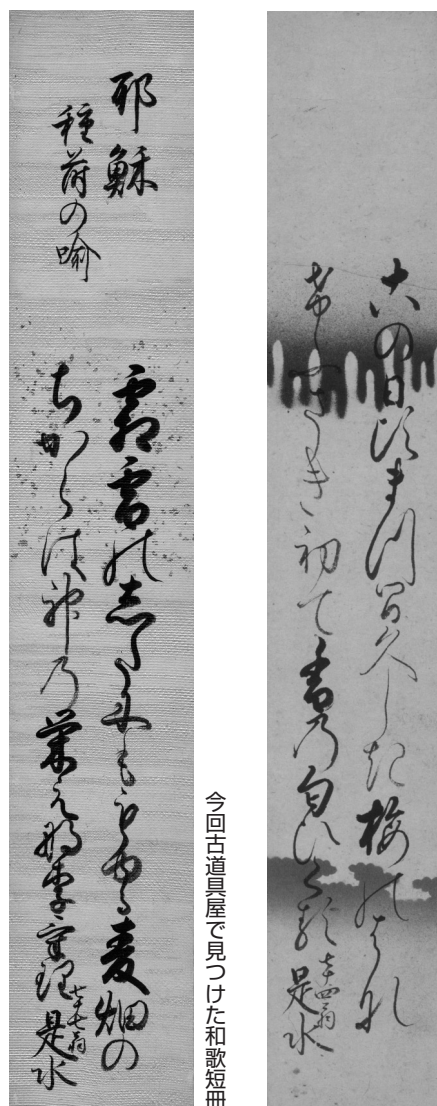
江戸時代の典型的な書風でありながらも、「耶蘇種蒔の喩」、すなわち聖書「マタイによる福音書」13章8節「『種を蒔く人』のたとえ」にある、次の箇所、

良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。

を踏まえている。「御言葉を聞いて悟る人」を「良い土地に蒔かれたもの(麦)」に喩え、大きな「実を結ぶ」と説く内容である。和歌を意識すれば、「苦難に耐え実を結ぶ麦畑の麦の力にも、神の栄光が示されている」となろうか。この短冊の裏面に小さく「新島襄君ノ父君」とあった。「是水」が民治の号であることを思い出し、急ぎ社史資料センター所蔵の民治の短冊と比較した結果、全体の形式および「乃」「是水」等の字形などから、同一の筆跡と判断できた。

短冊には七十七翁とある。おそらく数え年であろうから、明治16(1883)年に書かれたものと推定される。民治の篤い信仰心がうかがわれ、誠に好ましい自筆の和歌短冊である。

(文学部教授 神谷勝広)



資料業務

1. 資料整理

社史資料センター網別蔵書冊数(逐次刊行物は除く)

(2008年3月31日現在)

	00	10	20	30	40	50	60	70	80	90	合計	比率
0 総記	0	47	182	36	76	3	28	21	106	1,491	1,990	19.7%
1 哲学	14	8	165	31	24	139	43	19	77	1,324	1,844	18.3%
2 歴史	34	1,017	98	39	0	31	0	0	839	194	2,252	22.3%
3 社会	110	151	145	133	9	12	136	1,685	12	22	2,415	24.0%
4 自然	28	22	14	9	10	19	32	22	20	51	227	2.3%
5 技術	9	9	47	7	7	4	5	4	10	14	116	1.2%
6 産業	12	23	1	0	0	2	3	23	9	3	76	0.8%
7 芸術	23	2	74	9	13	20	30	5	23	7	206	2.0%
8 言語	8	68	15	67	9	4	0	2	1	10	184	1.8%
9 文学	30	519	114	82	23	2	0	0	2	1	773	7.7%

※日本十進分類法による分類

総冊数 10,083冊

2. 資料提供(写真資料を中心に)

資料提供日

2007年

- 4月 2日 柳川教育委員会:『やながわ人物誌』(仮称)掲載/海老名弾正関係写真4点
- 6月 12日 京都市教育委員会:博物館ガイドブック『京のかるちゃーすぽっと』(2007年12月発行)掲載/Neesima Room関係写真5点
- 6月 15日 農山漁村文化協会地域形成センター:『茶大百科』第I巻「喫茶の歴史」(農文協 2007年11月発行)掲載/新島八重写真1点
- 6月 27日 上毛新聞社出版局:『群馬県百科事典』(上毛新聞社 2008年発行予定)掲載/新島襄肖像写真、海老名弾正肖像写真各1点
- 6月 27日 NHKエデュケーショナル放送大学:放送大学講座「大学と社会('08)」教材第5回日本の近代化と大学(2008年4月から2012年3月まで放送)使用/新島襄肖像画写真、及び同志社英学校最初の専用校舎写真各1点
- 7月 19日 株式会社表現文化社:『SOGI』通巻100号(表現文化社 2007年7月発行)所収柴田千頭男「死と葬儀を通して見えてくる人・人生・世界 その8 同志社大学の創立者 新島襄<上>」掲載/新島襄関係写真8点
- 8月 2日 エフジー武蔵:『私のアンティーク[決定版]』(学習研究社 2007年発行)転載/『私のアンティーク』37号使用新島旧邸写真
- 8月 3日 吉川弘文館:宇田川武久編『鉄砲伝来の日本史』(吉川弘文館 2007年10月発行)転載/李人カール・レーマン写真1点
- 8月 27日 会津若松市教育委員会:第34回ふるさと散歩(2007年10月7日開催)参加者配布用しおり掲載/山本覚馬、及び山本八重写真各1点

-
- 9月 5日 株式会社DNP映像センター:「早稲田大学デジタル歴史館」(2007年10月から約1年配信)掲載/同志社英学校関係写真2点
- 9月14日 株式会社表現文化社:『SOGI』通巻101号(表現文化社 2007年9月発行)所収柴田千頭男「死と葬儀を通して見えてくる人・人生・世界 その9 同志社大学創立者 新島襄<下>」掲載/新島襄関係写真10点
- 9月25日 高梁市歴史美術館:高梁市歴史美術館特別展「新島襄と高梁の近代」関係出品展示及び広報用印刷物、図録掲載/同志社の文化財建築物関係写真7点
- 10月 5日 株式会社クリスチャントゥデイ:オンライン新聞『クリスチャントゥデイ』(2007年10月10日更新分)記事「新島旧邸特別公開の案内」掲載/新島旧邸関係写真2点
- 10月10日 高梁市歴史美術館:高梁市歴史美術館特別展「新島襄と高梁の近代」(2007年10月20日から11月25日まで)出品/新島遺品庫収蔵資料11点
- 10月18日 Café & internet c.coquet:外国人観光客向けトラベル月刊誌「Le journal de c.coquet」(2007年10月号)掲載/新島襄肖像写真など3点
- 10月19日 徳川美術館:小林善帆著『「花」の成立と展開』(和泉書院 2008年3月発行)掲載/人力車に乗るスタークウェザーとパーミリー写真、及び新島八重写真各1点
- 10月23日 株式会社K&Bパブリッシャーズ:『京都歴史散歩』(成美堂出版 2008年1月発行)掲載/新島旧邸居間写真1点
- 11月 2日 株式会社京都メディアセンター:KBS京都情報番組「京mosaic」(2007年11月17日O.A.)使用/『新島襄—その時代と生涯』所収写真5点、並びに啓明館設計図写真1点
- 11月 6日 株式会社日本アートセンター:『週刊新説戦乱の日本史』第7号(小学館 2008年3月発行)「江戸無血開城」掲載/勝海舟筆「六然の書」写真1点
- 11月20日 株式会社帝国書院:中学校社会科資料集(仮題)『中学スタンダード歴史資料』(帝国書院 2008年4月発行)掲載/新島襄肖像画写真
- 11月30日 合資会社十象舎:『週刊 日本の100人 番外編』第9号(ディアゴスティーニ・ジャパン 2008年3月11日発行予定)松平容保「人物相関図」掲載/新島八重肖像画写真
- 12月14日 毎日放送:「美の京都遺産」番組「古都の洋風建築・新島旧邸」Bs-1にて再放送(2008年内)
- 2008年
- 1月28日 神戸女学院史料室:機関誌『学院史料』第22号(2008年5月発行予定)掲載/同志社奉安殿写真
- 1月30日 有限責任中間法人福岡県人会:『福岡県人会会報』(同会 2008年2月発行)「郷土の先達」掲載/海老名弾正写真
- 2月 7日 編集制作プロダクションハユマ:『まるごとわかる「日本人」はじめて百科』(3)教育・文化をはぐくんだ人(日本図書センター 2008年2月発行)転載/新島襄肖像写真
- 2月18日 合資会社十象舎:『週刊 日本の100人 番外編』第9号(ディアゴスティーニ・ジャパン 2008年3月)松平容保「人物相関図」掲載/山本覚馬肖像写真
- 2月26日 『上毛新聞』長期連載「山河遙か」(2008年3月開始)新島襄編掲載/同志社関係写真6点
- 2月27日 株式会社TOPWORKS:『京都散策』(TOPWORKS 2008年3月発行)春号掲載/「薩摩藩邸跡」碑写真
- 3月11日 早稲田大学文化推進部:「早稲田と同志社—新島襄の弟子たち」展利用/新島襄及び同志社関係資料50点

展示

2007年度は、2回のNeesima Room企画展を実施し、Doshisha Spirit Week(キリスト教文化センター)、新島会館、ラーネッド記念図書館および理化学館(京田辺キャンパス)等への展示協力を行った。

1. Neesima Room企画展

・春学期(第31回企画展)

2007年4月2日(月)～8月31日(金)

テーマ:「同志社と戦争 1930～1945」

来訪者数:延べ3,560名



・秋学期(第32回企画展)

2007年10月1日(月)～

2008年2月29日(金)

テーマ:「大正デモクラシー期の同志社

—原田助総長と

海老名弾正総長の時代—」

来訪者数:延べ2,436名



調査員によるツアー(ホームカミングデー)

2. 特別展

・「早稲田と同志社—新島襄の弟子たち」展

2008年3月22日(土)から4月26日(土)まで、早稲田大学文化推進部が同志社社史資料センターと共催して大隈記念タワー10階 125記念展示室で開催。



「早稲田と同志社」展

創立125周年記念展示

早稲田と同志社
新島襄の弟子たち

Toyochika Inagaki
Hajime Choshi
Nobuo Kakimoto
Kazumasa Utsui
Iwao Ake

2008年 3/22(土)～4/26(土)

会場 早稲田大学大隈記念タワー10階
125記念展示室

会期 10時～18時(日曜休館)

共催 早稲田大学文化推進部
同志社大学社史資料センター

お問い合わせ 早稲田大学文化推進部 TEL.03-8272-4783
ホームページ http://www.waseda.jp/cac/

3. 展示協力

(1) Doshisha Spirit Week

- ・春学期 2007年6月11日(月)～16日(土)〈展示は春学期中〉
「戦後の同志社 1946～1986」をテーマにパネル20数点を展示。
- ・秋学期 2007年11月5日(月)～10日(土)〈展示は秋学期中〉
「同志社と戦争 1930～1945」をテーマにパネル20数点を展示。

(2) 新島会館

- ・2007年4月から9月まで
「躍動する同志社—京田辺開校20年—」をテーマとしてDoshisha Spirit Weekで展示したパネルから約20点を選択して展示。
- ・2007年10月から2008年3月まで
「戦後の同志社 1946～1986」をテーマにDoshisha Spirit Weekで扱ったパネルから約20点を選択して展示。

(3) 理化学館(京田辺キャンパス)

2007年4月より、2階ラウンジにて「新島襄が学んだ幕末の自然科学」をテーマに、数学、物理学、航海術、測量術関係の資料を展示。



理化学館2階ラウンジの展示

(4) THE DOSHISHA学校合同説明会

2007年7月29日、大学のオープンキャンパスと同時に開催された標記説明会に、展示協力。

(5) HAWAII WEEKのパネル展

2007年10月22日～26日開催の国際センター主催の標記パネル展に展示協力。

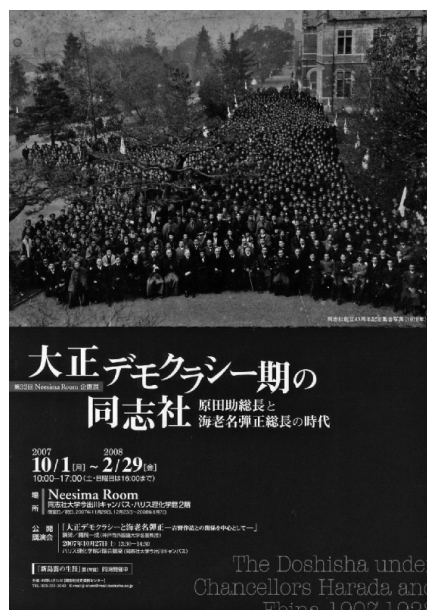
(6) ラーネッド記念図書館

2007年11月3日～4日開催、京田辺祭での「京都と同志社」展に展示協力。



「京都と同志社」展(ラーネッド記念図書館)

公開講演会



Neesima Roomの企画展のテーマに添った講演会を2回実施した。

- ・春学期：「戦時下の同志社—帝国日本の歴史の中で考える—」
講師：駒込 武(京都大学大学院教育学研究科准教授)
日時：2007年6月27日(水)14:00～15:00
場所：ハリス理化学館1階会議室(同志社大学今出川キャンパス)
- ・秋学期：「大正デモクラシーと海老名弾正—吉野作造との関係を中心として—」
講師：關岡 一成(神戸市外国語大学名誉教授)
日時：2007年10月27日(土)13:30～14:30
場所：ハリス理化学館2階会議室(同志社大学今出川キャンパス)



研究活動

1. 機関誌

『同志社談叢』第28号 A5版277頁 2008年3月1日発行	
論叢 新島襄と大村達斎－新出書簡をめぐって－ 京都看病婦学校と同志社病院(1) －ミッション資料“Life and Light for Woman” 1885.10－1887.9掲載内容－	本井 康博
資料紹介 新島美代が姉(佐藤真規)に宛てた書簡 J.D.デイヴィスとN.G.クラークの往復書簡(5)	小野 尚香 淡路 博和 森永長壹郎
翻訳 「同志社の土着化(1875～1919)」(その8)	北垣 宗治

2. 第一部門研究(新島研究)研究会 (代表 本井 康博)

第76回例会	2007年4月9日(月) ・「新島襄の数学ノート <i>Elements of Algebra</i> の原書について」 報告者:小枝 弘和
第77回例会	2007年5月14日(月) ・「Paul F. Boller 著、北垣宗治訳『アメリカン・ボードと同志社』 (新教出版社、2007)の意義」 報告者:北垣 宗治
第78回例会	2007年6月11日(月) ・「新島襄の実像を追う－太田雅夫『新島襄とその周辺』と 同『私の新島襄論』をめぐって－」 報告者:太田 雅夫
第79回例会	2007年8月4日(土) ・パネル討論会「新島死後の10年(1890～1900年)」 司 会:太田 雅夫 (1)時代的・社会的背景 報告者:井上 勝也 (2)同志社側から見た10年 報告者:本井 康博 (3)アメリカン・ボード側から見た10年 報告者:北垣 宗治 ・「新島襄の中山道の旅を辿る」 司 会:北垣 宗治 報告者:山田 興司



第80回例会	2007年9月10日(月) ・「新島襄の母とみと奉公先『信州中之条代官方』 —その人物の特定と業績、居宅地の判明、とみに与えた影響—」 報告者：関口 徹
第81回例会	2007年10月15日(月) ・「徳富蘇峰『終戦後日記』を読む」 報告者：服部 泰夫
第82回例会	2007年11月12日(月) ・「ヨハネによる福音書3章16節の解釈について—新島襄の場合—」 報告者：山本 真司
第83回例会	2007年12月10日(月) ・「新島襄の移動手段」 報告者：宮澤 正典
第84回例会	2008年1月21日(月) ・「新島襄が出会った女性たち」 報告者：竹山 幸男

3. 第一部門機関誌

『新島研究』第99号 A5版147頁 2008年2月29日発行

論叢	安中藩士岡田源七郎と新島家 —関口徹氏の所説にふれて— 新島襄の母とみと信州中之条代官荒井平兵衛 —その人物の特定と業績、一族と居宅地の解明— ラーネッドとセイヤー・カレッジ 同志社第2代社長・小崎弘道とアメリカン・ボード 北海道における同志社大学設立運動 —『北海道毎日新聞』を手がかりに—	籠谷 次郎 関口 徹 大越 哲仁 森永長壹郎 小枝 弘和
書評	太田雅夫著『新島襄とその周辺』(青山社刊 2007年3月) 『私の新島襄論』(雅風庵刊 2007年4月)	坂井 誠

第165回 新島襄生誕記念会

日時：2008年2月14日(木) 17:00～19:30

場所：同志社新島会館大研修室

表彰

新島研究論文賞 関口 徹(元埼玉県立川越工業高等学校教諭)
新島研究功績賞 『新島襄への扉』編集委員会

記念講演

演題：新島襄の母堂中田とみを尋ねて
講師：関口 徹(元埼玉県立川越工業高等学校教諭)

新島襄生誕記念懸賞論文(2007年度)

入選者

【中学校の部】

最優秀賞 秋富 紗衣(同志社中学校1年)
「新島襄の青春時代」

優秀賞 久保 絵莉子(同志社女子中学校1年)
「同志社女学校を支えた母娘」
丸山 あずさ(同志社国際中学校1年)
「若王子に眠る新島襄」
吉田 里沙(同志社中学校1年)
「同志社と山崎為徳」

佳作 山本 佳穂莉(同志社香里中学校1年)
「新島襄に共感して」
大住 理紗(同志社中学校1年)
「なぜ同志社は京都にあるのか」
岩間 志帆(風間浦中学校2年)
「『新島襄』と『風間浦村』」

【高等学校の部】

最優秀賞 中澤 和光(新島学園高等学校3年)
「新島襄のめざした良心教育～いまを生きる私たちに求められていること～」

優秀賞 井上 麗(同志社高等学校1年)
「良心を手腕に運用する人物～荻野吟子に関わった同志社の人々～」
長谷部 有紀(同志社国際高等学校3年)
「新島襄に学ぶスピーチ術」

佳作 小野寺 恵介(新島学園高等学校3年)
「幕末、明治に生きた新島襄の自由と愛の精神」
田中 慧(共愛学園高等学校1年)
「平和の使徒(つかい)新島襄」

【大学の部】

優秀賞 浜口 雄二(同志社大学大学院総合政策科学研究科博士課程(後期))
「『底辺に向かう志』と同志社～障害児への実践を通して～」



新島襄のめざした良心教育

～いまを生きる私たちに求められていること～

中澤 和光 (新島学園高等学校3年)

はじめに

「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」

これは新島襄先生(以下、「新島」とする¹⁾)の手紙の一節であり、今では同志社の顔として同志社大学今出川・京田辺両キャンパスをはじめ同志社香里中・高等学校、フィリップス・アカデミー(米)、そしてわが新島学園等に石碑が建てられている。「良心の全身に充滿したる丈夫の起り来らん事を」望みて止まざるなり、という新島から同志社普通学校の一生徒に宛てて書かれた手紙の一節は、「一国の良心」ともいうべき人物を同志社から輩出したい、という新島の教育理念を表現したものである。そこで、新島がなぜキリスト教による良心教育を普及させることに努めたのか、その時代背景や過程、そして新島が望むあるべき教育の姿について考察する。

1 新島の生涯と時代背景

まず、新島が教育者をめざすきっかけとなる新島の生涯を背景にみる。

新島は1843年に、安中藩(群馬県)の下級藩士・新島民治の長男に生まれ、21年間幕藩体制崩壊寸前の江戸で生活した。藩校では優秀な生徒だったので、藩主の板倉勝明にその学才を認められ、特別に蘭学を学ぶことが許された。だが、新島が15歳のときに名君として知られる勝明が他界し、多くの学者が学問所から離れていった。向学心旺盛な新島も藩務に就き、思うように学習できなくなって、内心の不満をつのらせていた。

新島が函館から密航を決行するのは1864年である。彼が国禁を犯してまで渡米しようと決意した理由はどこにあるのだろうか。息子を束縛し、既成の枠内に閉じ込めようとする父や家からの独立、新しい価値観を求めての古い封建社会からの離脱であったことも一因であろう。証拠に、アメリカ到着後初めて英語で書いた密航理由の手記で幕藩体制国家を厳しく批判している。換言すれば、明治維新の時代は、徳川旧体制を根本から否定し、政治も社会も生活習慣にいたるすべてを変革しようとする時期であった。そして、封建体制の抑圧のもとで勉学意欲をそがれ、人生を押しつぶされそうになっていた自身の経験から、近代国家に必要な人間を育てるには、国民の義務を政府の手だけに一任すべきではなく、国家の権威から独立した自治自立の教育が必要であると考えた。日本の近代化を精神文明という視点でとらえ、国家の問題を国民の「個の良心と自由」の問題と結びつけて、人民のためのキリスト教主義教育をいち早く取り入れたのが新島である。

2 キリスト教的良心教育と同志社

次に同志社の創立者である新島襄が教育にキリスト教精神が不可欠であると考えた理由につい

て考察する。

新島は1864年、21歳のとき函館から海外に密航を企て、翌年アメリカのボストンに着くと、ニューイングランドの名門校フィリップス・アカデミー、アマースト大学及びアンドーヴァー神学校で学んだ。彼がアメリカに着いたのは南北戦争終了直後であったが、未だニューイングランドにはピューリタンの伝統が残っていた。ピューリタンたちは新島を異民族でありながら自分たちと同じ神を信ずる者として、彼らの社会や家庭に息子のように暖かく迎え入れた。新島がアンドーヴァー神学校に在学中、岩倉具視一行の遣外施設団²⁾がワシントンに到着し、彼は文部理事官である田中不二麿の通訳を引き受け、欧米の教育施設や文化施設を見学し、教育制度を調査した。のちにこれらを検分した新島は次のような結論に達した。「即ち欧米文化をつくり出し、支えているものはキリスト教とデモクラシーと教育の力である。その視点は鉄道や軍艦といった近代文明の現象的な面よりも、その背後にあってそれをつくり出した人間に向けられ、人間の生き方を規定しているキリスト教、デモクラシー、教育が最大の関心事であったといえる³⁾」。すなわち、新島が大学をつくらうとした理由は、8年間のアメリカでの勉学と、それに続くこの欧米教育視察を通じて確信した「教育を通じて国家に奉仕する」という新島の使命感にある。近代的な市民国家における国民教育は、人民の自治精神の養成にこそ主眼があり、そのためには国家の干渉をできるだけ排除して、国民自身の手でそれを行なうべきであるという新島の信念が大学設立を動機づけたといえる。

さらに、新島は滞米中ニューイングランドの人々の生き方や考えだけでなく、彼らの教育活動や生産活動及び商取引など、人間のあらゆる活動がキリスト教やデモクラシーによって大きく影響を受けていることを認識した。また、新島はアメリカ建国の父祖たちが17世紀はじめにニューイングランドに移住して早くも10数年後にはハーバード大学を創設し、その後各地に大学をつくって地方を興し、国家を牽引する人物の養成を行ったことで、近代国家アメリカがつくられたことも理解していた。近代国家の建設にはキリスト教を信じ、デモクラシーを体得した「自治自立」の人間が必要であることを確信したのである。

そこで新島は1874年、10年ぶりに宣教師として帰国し、早速キリスト教を宣べ伝えるとともにキリスト教精神をもって教育を行なう学校の設立にとりかかり、翌年京都の地に同志社英学校を設立した。新島にとって教育とは学生が知識を学ぶことはもとより、知識を正しい目的に運用する智慧が重要で、そのためには道徳性を磨かなくてはならない。それを磨くのはキリスト教主義以外にはない、と考えたのである。

3 新島による良心教育

新島は、同志社英学校を創立後、1890年、46歳で亡くなったが、その15年間の生き方を見ると、いかにもキリスト教的教育者として一貫している。彼は福沢諭吉のように書物を残さなかったが、日記や手紙、説教原稿を多く残している。彼の英語の日記の中に「人間の偉大さ」と題するエッセイがあるが、次のように書かれている。「人間の偉大さは彼の学問によるのではなく、自分が公平無私になることにあるのだ。多くの学問を積んだ人間は学問のない人間よりも利己的な傾

向がある。十字架のキリストを見よう。彼は我々の模範である。彼はいかに高貴で堂々としており、慈悲深く見えることか。本当の罪を悔い改め、謙虚になろう。私はこういうことを人間の偉大さと呼ぶのだ⁴⁾。新島の目指す人間の理想像がよく描かれている。

さて、新島は強烈な人格を通してこのような考え方を日々の教育実践の中で具体化した結果、同志社から多くのキリスト教関係者が輩出した。たとえば、徳富蘇峰は新島の思い出を次のように言っている。「筆者は毎日此の朝礼に出席することを大きな楽しみとした。それは近くに新島其人を見ることが出来るからである。新島の朝の5分間の訓話や学生心得書の朗読はとも角も新島其人を見ることが予にとっては一種の感激即ちインスピレーションであった。新島は別に豪傑ぶらず学者ぶらず仙人でもなければ聖者でもなく、ただ一個の平凡なる普通人であるが、然も彼の風格はそくそくとして人を動かすものがあつた。筆者は彼の風格に接する毎に人間として斯あらねばならぬものと考え、常に今なお其の印象が鮮やかに我が胸間に生きて居る様な心地がする⁵⁾」蘇峰の語る一個の平凡なる普通人新島は常に高き志の実現に情熱を燃やし、忍耐強く誠実で他者を思う心が豊かで、学生を極みまで愛する教育者であった。このような新島の生き方を規定しているものは堅固な信仰といえよう。それは彼の人格を通して発散され、学生たちに強烈な感化を与えたものと考えられる。

おわりに

最後に、私は中学校からこの新島学園で、新島襄とキリスト教をはじめさまざまなことを学んできた。それゆえ、同志社の創立者新島襄の人間性、人格、教育者としての生き方、彼の建学理念及びその意義を理解し、自分なりに捉えることが重要だと考える。今までも新島に関する様々なエピソードを聞いてきたが、他の学校とは異なった新島そして同志社の独自性は、創立者や彼に学んだ卒業生から育まれてきたものであり、それが100年近く伝統として受け継がれていることが理解できた。

私は新島の人間性、人格、生きざまに強く魅かされている。すなわち、新島は両親を捨て、藩主の許可も得ず、国禁を犯して日本を脱したことも、同志社をつくるために文部官僚のポストを断ったことも、キリスト教を排除しようとする日本の風土や体制のなかで、あえて京都の地にキリスト教主義の学校を設立したことも、常人ではなかなかできないことを平然と勇気と決意を持ってやり遂げた。熟慮したうえでの決心に対しては、いかなる強い反対や妨害があっても後退せず、前進するのみという逞しさがある。見方を変えれば、新島は強烈な自由人であったともいえる。しかし、教育者、精神家として今でも新島の教えは多くの人を育て、多くの人に敬愛されている。それは、今日の同志社及び新島の校風である「自由自治」につながるであろう。

また、彼は至るところで「心友」をつくっている。心を許しあい、深く理解しあえる生涯の友を国内外問わずたくさんもっている。新島の生涯は、これらの人々なくしては考えられないのではないだろうか。なかでもハーディー夫妻は自分たちの息子のように新島を愛し、教育を受けさせ、日本での宣教活動や同志社の設立と維持に、公私共に莫大な精神的・経済的支援をしてくれた。

新島のために自分の命をかける人、たとえば福土卯之吉はその一人である。密航幫助が露呈す

れば、彼も従犯として捕まることを知りながら、福士は新島を助けた。新島と福士はたった2週間弱の付き合いであったことを考えると、新島に何か相手の心をとらえ、動かすものがあつたに違いない。それは、新島の真摯で誠実な姿勢、自己の信ずる唯一の道を突き進もうとする強烈な意志、日々の言動のなかに完全にとけ込んだ彼の信仰、感謝の気持ち、謙虚さ、誰であれ相手を人格として捉え尊ぶ姿勢などの新島の特徴が多くの人を魅きつけ、深い信頼関係を結ぶと考えられる。

いま、自分の将来について「教育者」という道を模索している私にとって教育者新島の存在、役割に強い関心を抱いており、新島について知れば知るほど興味深く魅せられて止まない。

今日、大きな変革期を迎えているわが国では、あらゆる分野で新しい価値観が生まれ、構造改革が進んでいる。政治経済から教育に至るまで、日本人としての生き方が問われている。近代日本の高等教育の礎となった新島襄の設立の苦難を知り、その根源となった「建学の精神」を改めて確認し、その業績から教訓を学びとることは大変意義深いものとする。そして、それだけに止まることなく、その精神が現在に生き、さらに未来に向かって継承させていくことこそが、いま新島の精神を学び生きる私達の責務であるとする。

〔注〕

- 1) 新島本人も教師と学生は縦の関係ではなく、学生とともに真理を探究しようとする謙虚な姿勢にこそ教師に求められると考え、「先生」と呼ばれることを好まなかった。
- 2) 明治維新は、国家体制と文明そのものが国民を巻き込んで同時に変容するという、新たな発展の可能性と同時に矛盾も内包する時代だった。なかでも教育制度の改革は、文明化を進めるうえで不可欠な課題であり、1871年、明治新政府は岩倉使節団を欧米主要国へ派遣し、外交活動と並行して、新政策を立案するための参考に、西欧文明、産業、教育事情の視察を行なった。
- 3) 井上勝也『国家と教育－森有礼と新島襄の比較研究－』晃洋書房、2000年、153頁
- 4) 『新島襄全集』7、英文資料編、同朋舎、1996年、311－312頁
- 5) 同志社社史資料室編『創設期の同志社－卒業生たちの回想録』同志社社史資料室、1986年、276頁

〔参考文献〕

- 井垣 章二他『社会福祉の先駆者たち』筒井書房、2004年
- 井上 勝也 『国家と教育－森有礼と新島襄の比較研究－』晃洋書房、2000年
- 同 『新島襄 人と思想』晃洋書房、1990年
- 岡本 清一 『新島襄』同志社大学出版部、1978年
- 「現代語で読む新島襄」編集委員会編
『現代語で読む新島襄』丸善、2000年
- 志村 和次郎『新島襄と私立大学の創立者たち』キリスト新聞社、2004年
- 本井 康博 『新島襄と徳富蘇峰－熊本バンド・福沢諭吉・中江兆民をめぐる－』晃洋書房、2002年
- 同 『ひとりは大切 新島襄を語る(二)』思文閣出版、2006年
- 吉田 曠二 『新島襄－自由への戦略－』新教出版社、1988年
- 同志社大学人文科学研究部編
『外国人教師の目に映った百年前の同志社』同志社大学人文科学研究部、1995年
- 同 『自由の風土・在野の精神』同志社大学人文科学研究部、1995年
- 同志社社史資料室編
『創設期の同志社－卒業生たちの回想録』同志社社史資料室、1986年

新島襄の青年時代

秋富 紗衣 (同志社中学校1年)

「誰が私を創ったか。両親か。いや、神だ。私の机を作ったのは誰か。大工か。いや、神は地上に木を育てられた。神は大工に私の机を作らせられたが、その机は現実どこかの木からできたものだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない」¹⁾ これは新島襄先生が、青年時代に初めて聖書を読んだ時の感想だ。鎖国下の封建的な社会の中で、親や主君をはるかに超えた神の存在に気づいた新島襄。新たな価値観にめぐりあえた感動が、この文章から伝わってくるような気がする。それは当時の日本人にとっては多分、心の革命に近いことだったのではないか。若い日の先生の素直で柔軟な感性があったからこそ、日本にキリスト教が芽ぶき、同志社が誕生して今日まで歴史を刻んでいる。その伸ばした枝の先っぽに私たちが連なっていることに、私は胸が熱くなる思いがした。

先生の心に聖書の教えが響いたのには、いくつかのきっかけがあったと思う。

軍艦教授所に通っていた17歳の頃、江戸湾にオランダの軍艦が停泊していた。「威厳に満ち、おそろしく見えた」²⁾ため、「私たちは海軍を作らなくてはならぬ」³⁾、「日本人は外国人と貿易する方法を知らないから、私たちは外国に出かけて貿易の仕方を覚え、外国に関する知識を学ばなくてはならない」⁴⁾と感じた。しかし、こんな考え方は、周囲には受け入れられず、怒りをおぼえる。

また同じ年の冬、備中松山藩主板倉勝静から玉島への航海を命じられた。「安中藩の正方形の囲い地」⁵⁾で過ごしてきた新島にとっては「精神的な視野を大きく広げさせた」⁶⁾「自由への新鮮な思いが満たされた」⁷⁾経験となる。

さらに師から借りた『ロビンソン・クルーソー物語』や『聯邦志略』などの書物。快適で文化的な市民生活が営まれている海の彼方の国々への憧れ。その市民社会を根底から支えているキリスト教の存在。聖書によって天父の存在が新島の心にはっきりと結ばれ、「自分自身の道を進まなければならない。地上の両親より天父に仕えなければならない」⁸⁾と、ついに密出国を決意する。

海外で外国の文化や政治を学びたい、自分の力で日本を変えたいと願っていた新島にとって、「天父」は、自分の目標を明るく照らし、後押ししてくれる一筋の希望であっただろう。脱国の志が間違いではないことを確信させ、勇気へと変えてくれたのだと思う。アメリカでの困難も、天命に従うためと思えたからこそ乗り越えられた。キリスト教を通してのさまざまな出会いが、新島の前に新しい扉を開いていったことに、私も天命を感じた。

夏休みに『塩狩峠』(三浦綾子著)を読んだ時、明治初期の日本でのキリスト教が大変抵抗感を持って迎えられていたことを知った。新島先生と初期の同志社にもさまざまな困難があったのだろう。乗り越えられてきた歴史はとても重いと思う。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもそ

の人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ」⁹⁾

二学期になってこの聖句を礼拝で聞いた。同志社の枝の先っぽにいる私たちは、神様の大きな木につながっている。つながっているからこそ、社会で実を結んでいける。その実は、やはり、神様に心を偽るような、不誠実なものであってはならないはずだ。そんなことが、なんだか心にストーンと落ちるようで、とてもうれしい気持ちになった。礼拝で聖書の朗読や先生方のお話に耳をかたむける15分間は、神様と私との距離を少しずつ近づけてくれる。

最近、バスで座っていると老夫婦が乗ってきた。私は譲ろうとしたけれど、一人席だった。一瞬迷ったが、「一人席ですけど座って下さい」と言うと、とても喜んで「ありがとう」と言って下さった。私自身も気持ちがすっきりしてうれしかった。塩狩峠で、乗客のために列車の下敷きになって亡くなったキリスト教信者の主人公永野信夫のように命まで犠牲にすることはできない。新島のように国のために自分の身をささげる勇気もない。立つ位置が全く異なるけれど、少しずつなら何かできる。神様はいつも私たちを見守ってくださる。そう思えることが私に勇気を与えてくれる。

以前、オリエンテーションキャンプで校長先生に教わったのだが、同志社のマークの意味は、二通りあるそうだ。一つは、新島が通ったアメリカのアーモスト大学の教育目標で「知・徳・体」。そしてもうひとつは、「自由・自治・自立」。「自由を求め、人間として誇りを持ち、人のためにつくすことが喜びとなるようにする」という意味を持つ。

「良心を手腕に運用する人物」という新島襄の掲げた目標が何とすばらしい意味を持つか、入学した半年前よりは少しは分かってきたような気がしている。心の中でたえず自分に呼びかけながら、若い日の新島のように感性をとぎすまし、学んでいきたいと思っている。

〔注〕

- 1) 「現代語で読む新島襄」編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善・2000年・p.54
- 2) 前掲書・p.15
- 3) 前掲書・p.52
- 4) 前掲書・p.53
- 5) 前掲書・p.15
- 6) 前掲書・p.15
- 7) 前掲書・p.15
- 8) 前掲書・p.17
- 9) 共同訳聖書実行委員会『新約聖書』「ヨハネによる福音書」15章5節・日本聖書協会・2007年

〔参考文献〕

- 新島襄への扉編集委員会編『新島襄への扉』日本キリスト教団出版局・2006年
- 「現代語で読む新島襄」編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善・2000年
- 共同訳聖書実行委員会『新約聖書』日本聖書協会

新島旧邸

ボストンの友人J. M. シアーズの寄付によって建てられた新島襄の私邸で和洋折衷の木造二階建て住宅として、また、同志社創立者の旧居として価値が高く、1985年に家具・調度類を含めて京都市有形文化財に指定された。

■公開日

3月～7月、9月～11月の毎週水・土・日曜日(ただし祝日、休日は除く)
春と秋の京都御所一般公開期間中および11月29日(同志社創立記念日)

■公開時間

10:00～16:00

<2007年度見学者数>

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	3月	合計
948人	490人	436人	498人	317人	549人	1,429人	807人	5,474人



新島旧邸



書斎

委員会

同志社社史資料センター委員会委員 (2007年度)

露口 卓也	同志社社史資料センター所長	菊地 登	高等学校
圓月 勝博	教務部長	瀧 英次	香里中学校・高等学校
片山 傳生	企画部長	太田 信幸	女子中学校・高等学校
中山 健二	総務部長	敦賀 昭夫	国際中学校・高等学校
風間 規男	人文科学研究所長	竹山 幸男	中学校
斉藤 延喜	歴史資料館長	本井 康博	神学部
植田 弘	法人事務部長	出原 政雄	法学部
小崎 眞	女子大学		

同志社社史資料センター運営委員会委員 (2007年度)

露口 卓也	同志社社史資料センター所長	出原 政雄	法学部
風間 規男	人文科学研究所長	小崎 眞	女子大学
植田 弘	法人事務部長	太田 信幸	女子中学校・高等学校
本井 康博	神学部	竹山 幸男	中学校

事務室	所長	露口 卓也
	参与	田中 昭彦
	事務長	岩田 喬
	担当課長	馬淵 吉倫
	社史資料調査員	小枝 弘和
	社史資料調査員	栗原 真美
	アルバイト	3名

新島旧邸	アルバイト	3名 (4名で交代勤務)
Neesima Room	院生アルバイト	1名 (2名で交代勤務)

同志社社史資料センター規程

2004年4月24日制定

(設置)

第1条 本学同志社社史資料センター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、創立者新島襄並びに同志社関連資料の収集、整理、保存及び公開業務を継続、発展させ、同志社創立以来の歴史と伝統を後世に継承していくとともに同志社教育の充実と発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- (1) 同志社社史資料の研究、収集、整理、保存及び公開に関すること。
- (2) 新島研究に関すること。
- (3) 同志社社史編纂に関すること。
- (4) 『同志社談叢』の発行に関すること。
- (5) Neesima Room の管理運営に関すること。
- (6) ハリス理化学校記念展示室の管理運営に関すること。
- (7) 新島遺品庫の管理運営に関すること。
- (8) 新島襄旧邸の管理運営に関すること。
- (9) 新島襄及び同志社建学の精神についての啓蒙活動に関すること。
- (10) その他センター設置の目的に照らして必要と認められる事業

(所長)

第4条 センターに所長を置く。

- 2 所長は、学長が任命し、センターの業務を統括する。
- 3 所長の任期は1年とし、再任を妨げない。

(同志社社史資料センター委員会)

第5条 センターに同志社社史資料センター委員会(以下「センター委員会」という。)を置き、以下の事項について審議する。

- (1) センターの事業に関すること。
- (2) 社史資料調査員の候補者推薦に関すること。
- (3) その他必要な事項

(センター委員会の構成)

第6条 センター委員会は、次の者をもって構成し、委員は学長が委嘱する。

- (1) 所長
- (2) 教務部長、企画部長、総務部長、人文科学研究所長、歴史資料館長及び法人事務部長
- (3) 女子大学、高等学校、香里中学校・高等学校、女子中学校・高等学校、国際中学校・高等学校、中学校から各1名
- (4) 学識経験者若干名

2 第1項第3号に掲げる委員は、各学校長の推薦により学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

3 第1項第4号に掲げる委員は、所長の推薦により学長が委嘱し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

4 センター委員会は、所長が招集し、議長となる。

5 センター委員会は、委員の過半数をもって成立し、議事は出席者の2分の1以上の賛成をもって決する。ただし、第5条第2号に係わる議決は出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。

(運営委員会)

第7条 センター委員会に同志社社史資料センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会は、第3条に掲げる事項について計画立案し、センター委員会の議を経てその実施にあたる。

(運営委員会の構成)

第8条 運営委員会は、次の者で構成する。

- (1) 所長
 - (2) 第6条に掲げる者のうち所長が任命する者若干名
 - (3) 所長が必要と認めた者若干名
- 2 委員の任期は1年とし、再任を妨げない。
 - 3 委員会は、所長が招集し、議長となる。

(事務室)

第9条 センターに事務室を置く。

- 2 事務室に職員若干名を置き、センターの事業、委員会に関わる事務、その他必要な事務を行う。
- 3 センターの事務組織は、同志社大学事務機構規程に定めるところによる。

(社史資料調査員)

第10条 事務室に社史資料調査員たる職員若干名を置く。

- 2 社史資料調査員は、社史資料の収集、整理、調査、企画、展示等の業務を行う。
- 3 社史資料調査員の選考に関する事項は、別に定める。

(事務の所管)

第11条 この規程に関する事務は、同志社社史資料センター事務室が行う。

(改廃)

第12条 この規程の改廃は、センター委員会の議を経て大学評議会でを行う。

附 則

この規程は、2004年5月1日から施行する。

同志社大学
同志社社史資料センター報 第4号

発行日 2008年4月30日
編集・発行 同志社大学 同志社社史資料センター
〒602-8580京都市上京区今出川通烏丸東入
Tel. 075-251-3042 Fax. 075-251-3055
<http://www.doshisha.ac.jp/academics/institute/archives/>

表紙イラスト：左は、新島襄が留学時代にラテン語ノートに描いたスケッチ。
右は、その1頁